

隨 筆

防 災 譚

星 野 昌 一

さきに法隆寺を焼き、また金閣を失つてしまつた。紙と木でできているわが國の建築のこと故、燃えずに今まで残つていたのがむしろ不思議なくらいである。數百年から千年以上も兵亂のたえなかつたわが國で、このような脆弱なものが、兵火にもあわず、風や虫の害にもおかさず雪にもうたれずに残つたことは、世界各地にその例をみない不思議であつて、その意味でわが國の國寶建造物は世界的の價值のあるものであるこれを火災報知や防火設備のとのつた今日、つぎつぎに焼いてゆくことは、天才的な才能をもつわが子を一寸した不注意で失うに似た残念さを感じさせる。

一體このような木造建築物が、火災報知器や消防施設の充實だけで火災からまもりうるものであろうか。木造家屋の火災の性状はちようど日本人の性格によく似て非常に氣の早いものであり、發火から4、5分で1000°C以上の高温になり、7分で最高の1200°C~1300°Cに達し、10分たてば1000°C以下になり、200°C~300°Cの温度が1時間以上持續するそれで、最初の2~3分間に處置しなければ、その建物を救うことは不可能であり、火災報知器の類も、100°C~200°Cを迅速に検出して、これに直結したスプリンクラーのような自動消火装置が働くようになっていなければ間にあわないから、普通の消火器材では無風時のあまり大きくない火災の延焼を喰いとめるくらいの役にしかたない。またスプリンクラーもどの部分にも萬べんなく配置され、しかも絶対に一定の水壓がたもたれていなければならず、どんな優秀な器材でも管理上の手落ちがあれば安全とはいえない。このよ

うな科學的装置は充分な計畫設備と細心の注意がともなつてはじめて價値があるもので、これがあるからといつて安心していたのでは、かえつてマイナスになることが多い。この點はむしろ、何の装置もなかつた過去數百年の間の人々の、物を大切にす心理の方がよほど効果的であつたと考えられ、これをわすれた科學は、この意味でかえつて有害であるといえよう。

熱海の火災も、もう人々の心を去りかけているが、忘れた頃には前と同じような、いや前よりひどいマッチ箱で埋めつくされている。資材がない、餘裕がないというのがつきもので、いつでも大火災のあとの復興は、また火種をつぎこむことで終つてしまう。ここは辛棒して、たとえ復興が10年20年のびても、再び燃えない街をつくるのが、結局終局の復興を早めることはわかりきつてゐる。こまごましい目先の慾にかられるのが日本人の悪い癖であり、貧乏人の錢失いをくりかえすことになる。イギリスのように父子代々一着の洋服を傳える位の考えがあれば、はじめはくしくしても、いつかは立派な街を子孫に傳え、結局國民生活を高めることができる。

軍備のいらぬ現在は、鐵やセメント、アルミなどを國民生活の向上につぎとみうる絶好の機會である。殖民地をもたない日本は好むと好まざるとにかかわらず、工業力で人口を養わなければ成り立つてゆかないそこで、あり餘つてゐる工業施設をフルに活用して、従来手工業によつていたものまで工業製品におきかえあまつた労働力を工業につぎこんでえられる大きな工業餘力をもつて、アジア全體の工業をまかなうくらいにしなければならぬ。失業救済の美名にかくれて、能率の悪い手工業に努力を空費することは、目先だけの解決策であつて、終局には日本は取残された貧乏國におちる結果となる。これを合理的に解決するには、職業編成から、さらにそれ以前の教育制度から、根本的に検討して、明治以來確固たる歩をきざいた法科萬能の社會體制を適當に改めてゆく必

要がある。過去の因習はなかなか改められるものではないが、生産方式の工業化という世界の大きな歩みにおくれれば、もうとりかえしのつかない後進國になり下つてしまつてゐる。

都市不燃化にはいろいろの途があるが、木造のいけないことは世界各國の例でもあきらかだ、歐米では嚴密な法規で制限して都市に木造を禁止して、はじめて現在のような不燃都市になつてゐるので、木材が足りないからだというような理由からでは絶対にない。木造を難燃性にする研究は、現状ではきわめて必要でありまた貴重なものであるけれども、それだからといつて不燃性の新しい構造をしりぞけることは不可である。鐵筋コンクリートは防火上完全に近いが、それでもその工事方法の手工業性はあらためる必要があり、また自重のため基礎から柱、壁にいたるまで不必要な無駄が多い。そして近い將來、模様かえを必要とするときに、その構造體がマイナスの努力をつくつてしまふのである。

鋼材や輕金屬の性能の向上と、構造方式の工業化と合理化による經濟性は、從來もつとも高價とされた金屬構造に新しい用途をあてるようになりつつある。建築は人體の骨格と皮膚のようなものでなければならぬという言葉のように、構造から表面まであらゆる部分を一つのものでつくる思想はもう古いといつてよい。力學的な構造體と、あらゆる機能に應じた表面體とは當然異なる性状をもつべきで、その間に新しい設備に必要な配管、配線、絶縁などの機能系統が裝備されるようになる。新しい建築材料はこのような分化された要求に應じるように考案され、結合されて、何一つ無駄のない、切れれば血の出るような有機體にまとめ上げらるべきである。こうして、寒暖風雨はもとより、火災にも、地震にも、空襲にも盜賊にも、たえるような構造に一步一步進めてゆきたいものである。

☆ ☆